

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20046

研究課題名（和文）日本戦国期における一揆と地域社会の関係に関する研究：畿内近国に視点を置いて

研究課題名（英文）Research on the relationship between ikki and local communities during the Sengoku period in Japan: Perspectives on the Kinai Nearby Countries

研究代表者

水林 純（MIZUBAYASHI, Jun）

一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師（ジュニアフェロー）

研究者番号：30961990

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、伊勢国一志郡小倭郷と駿河国駿東郡口野郷をフィールドとして、戦国期における土豪層の歴史的な性格について分析を行った。その結果、以下に述べる知見を得ることができた。

（1）小倭郷の土豪層は、独自の私領支配を展開する自律的な小領主であった。彼らは、土豪相互の所領争いを判定的・協定的に解決するための法秩序を実現しており、そこには、一揆的地域権力の特色が強く表れている。

（2）戦国前中期における口野郷の土豪植松氏は、独自の所領・人民支配を自力で行う存在であり、その性格は、国衆権力（葛山氏）によっても破られなかった。しかし、彼らは後に、戦国大名権力（北条氏）の影響下、自律性を喪失することとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの戦国期研究において、戦国大名ら地域権力の支配体制（大名による領国の一元支配）や、その下での在地社会のあり方（村請制を介した、大名による村落団体の統治・管轄）は、しばしば近世社会の性格を先取りするものとされてきた。他方、本研究は、それとは異なる側面、すなわち、後の近世社会では主流となり得なかった、戦国期固有の地域秩序を明らかにするものとなった。土豪層による共和的な地域統治である一揆体制、および国衆支配下における土豪層の存在形態（自律的な領主制）の具体的説明がそれに当たるが、これらの成果は、当該期の地域社会の中で育まれた、いわば「未発の契機」に光を当てる点で、一定の意義をもつであろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, the historical character of local influential figures(Dogo) during the Sengoku period was analysed in the fields of Oyamato-Gou, Isshi-gun, Ise Province and Kuchino-Gou, Sunto-gun, Suruga Province. As a result, the following findings were obtained.

(1) The local authorities(Dogo) in the Oyamato-Gou were autonomous small lords who developed their own private territorial control. They realised a legal order for resolving territorial disputes between native landowners(Dogo) in a judgmental and consensual manner, in which the characteristics of Ikki-like regional power are strongly expressed.

(2) The Uematsu clan, a native of Kuchino Gou in the pre-mid-Sengoku period, was a self-reliant entity that ruled its own territory and people, and this character was not breached by the Kunishu power (the Kazurayama clan). However, they later lost their autonomy under the influence of the Sengoku daimyo power (the Hojo clan).

研究分野：日本史

キーワード：戦国期 16世紀 一揆 土豪 村落 国衆 地域権力

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景・前提として挙げられるのは、昨今の戦国期研究における「地域権力」論の蓄積である。近年の中世史研究において、戦国期は、様々な地域権力が、各々に独自の方式をもって自らの領分を支配する一方、みな共通して、自らの領分に住む人々の直面する課題に対処することで、地域秩序を安定化させるよう努めていた時代であると認識されているが、とりわけ戦国大名研究の展開には注目すべきものがある。すなわち、戦国大名は、単に民衆を抑圧するだけでなく、農業振興や紛争解決、「市場の平和」の維持等を通じて、「地域社会の人々にとり有益な存在」(＝地域権力)たろうとしていたことが解明されつつあるのである。本研究も、かかる研究潮流の意義を認める立場から、戦国期の地域権力が当該期の社会に対して担った役割を一層深めようとするものである。

その中でも、本研究は、戦国大名と比して、相対的に研究蓄積が手薄であった「一揆」(一定の地理的範囲内に点在する土豪層・領主層が、互いの権利と対等な地位を承認し合いながら、誓約によって形成した「コンミュン」型の政治権力)に注目する点で、特色を有している。かつて筆者は、戦国期畿内近国の一揆関連史料を読み進めるなかで、一揆は従来強調されてきた反体制闘争であるよりも、まず地域社会を自律的に運営する公権力(用益管理、対外交渉、住民の再生産維持などの責務を果たす権力)であることを確信するに至った(水林純「紀州惣国下の土豪連合の地域権力の性格:紀伊国名草郡を事例に」『年報中世史研究』44号、2019年など)。かかる経験を得たことが、戦国期の一揆が当時の社会において担った地域運営主体としての歴史的役割をより発展的に考察しようとする決意するきっかけとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、下記の二点に集約される。

- (1) 戦国期の一揆がもつ地域権力としての特質を解明する。
- (2) 戦国期の一揆を構成した、畿内近国における領主・土豪層の性格を、東国(国衆および戦国大名の支配領域)との比較を通じて明らかにする。

近年の学界では、15世紀から17世紀までの時代を「中世・近世移行期」と呼ぶとともに、当該期を中世から近世に向けて社会が緩やかに移行する時代と捉える気運が高まっており、中でもその前半期である戦国期の歴史的意義を考察する動きが盛んとなっている。しかし、そこでは、()戦国期社会のあり方を近世のそれと基本的に同質であったと捉えるほか、()戦国期におけるあらゆる政治権力の性格を、遍く同質のものと評価するなど、やや静態的かつ平板な歴史像が表明されるに至っている。それに対して、本研究は、戦国期の地域権力が有した性格を、近世との連続面のみならず、断絶面の観点から位置づけようとする点、戦国期の権力構造をその多面性の側面(一揆の特質)から観察する点で特色を有する。

3. 研究の方法

上掲「2. 研究の目的」で述べた(1)・(2)の課題を達成すべく、本研究では、下記の研究方法をとった。

- (1) 戦国期の畿内近国村落において形成された、在地有力者(土豪層)による一揆が、どのような法秩序を形成したのかという問いを究明する。フィールドは、伊勢国一志郡小倭郷(現三重県津市)である。具体的には、戦国期の小倭郷における中核的寺院であった成願寺に伝存する、殿原起請文(土豪層による一揆の法を定めた文書)に着目し、それが謳う規範の性格を、(当該地域の社会構造との関連に留意しつつ)追究する。
- (2) 16世紀において、国衆葛山氏、ついで戦国大名北条氏の統治を受けた駿河国東部(現静岡県沼津市)の海村地域に注目しつつ、当該地域における在地有力者(土豪層)と地域権力(とりわけ国衆葛山氏)の関係を、(畿内近国の一揆成立地域との比較も行いながら)追究する。

4. 研究成果

本研究の主要な成果は、(1)「戦国期村落における一揆の法と身分階層秩序:伊勢国小

倭郷を対象に」(『年報中世史研究』第48号、2023年5月)および(2)「戦国期東国の在地社会に見る土豪層と国衆の関係:天文二十一年四月二十七日葛山氏元判物考」(『一橋社会科学』第15巻、2023年11月)の、二本の活字論文に結実した。上記の成果を通じて、以下の知見が明らかにされた。

(1)「戦国期村落における一揆の法と身分階層秩序」。

小倭郷の土豪層は、土豪同士の間で惹き起こされる刑事事件(盗みなど)の抑止や、彼らの所有する「被官」(奴隸的従者)をめぐる土豪間の争い解決などを実現すべく、彼ら独自の法を制定するに至った。その中でも、土豪層の一揆法において注目に値するのは、彼らが、同輩同士の民事訴訟(土地権利をめぐる争い)を理非の基準に基づいて裁判するための、判定的・協定的趣旨の立法を行った点である。

上記のような性格をもつ法秩序を土豪層が形成した背景には、彼らが、自律的な領主的権利(私権)を行使する主体へ成長していた事実が存在した。

こうした、戦国期の土豪層によって形成された一揆法の秩序は、近世の在地社会には見られないものであり、戦国期に独自のものであると考えられる。

(2)「戦国期東国の在地社会に見る土豪層と国衆の関係」。

戦国中期以前の植松氏は、口野郷に拠点を置く自律的な領主であり、植松氏は、網度(漁場)や網舟などの漁業関連の生産財、山屋敷や百姓を独自に支配するとともに、年貢・公事を収取する階層であった。

葛山氏は、戦国中期に植松氏を自らの影響下に置く。しかし、葛山氏は、植松氏の領主的権利を大幅に承認し、かつ保証することによって、植松氏の支持を取り付けることが可能となった。

具体的には、植松氏ら土豪間の争いを調停・解決し、土地権利に関しての彼らの要求を汲み取ることによって、葛山氏は、当該地域に進出することができた。土豪層の土地権利に関する保障権力ないし裁判権力、これこそが、国衆葛山氏の性格であった。

他方で、当該地域の土豪たちは、同輩者間のヨコの連合を通じて、自らの権利の相互保障と、住人間の利害対立の調整を行う様子は見せなかった。むしろ、彼らは、上級領主の権威(権益安堵のもつ効力)への依存を通じて、土豪間の争いを、自身に有利な方向で解決しようとする傾向が強く、これが後に、戦国大名北条氏の強力な支配政策をさしたる抵抗なく受容する一つの背景をなしたものと推測される。ここに、畿内近国の一揆成立地域との相違が見られる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 水林純	4. 巻 72巻5号
2. 論文標題 戦国期伊勢国の「徳政」とその研究視角：地域社会論的観点からの展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 5 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水林純	4. 巻 48
2. 論文標題 戦国期村落における一揆の法と身分階層秩序：伊勢国一志郡小倭郷を対象に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 年報中世史研究	6. 最初と最後の頁 31 - 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水林純	4. 巻 15
2. 論文標題 戦国期東国の在地社会に見る土豪層と国衆の関係：天文二十一年四月二十七日葛山氏元判物考	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 25～51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/80947	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 水林純	
2. 発表標題 戦国期の荘郷における一揆の法と身分階層秩序：伊勢国一志郡小倭郷を対象に	
3. 学会等名 中世史研究会50周年記念大会	
4. 発表年 2022年	

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------